令和元年度第２回大阪府立江之子島文化芸術創造センター指定管理者評価委員会　議事概要

日　時：令和２年２月 10 日（月）15：30～17:30

場　所：大阪府立江之子島文化芸術創造センター　２階　多目的ルーム８

出席者：服部委員長、佐藤委員、坪池委員、藤田委員、米山委員、指定管理者、事務局

【議事概要】

１　開会
２　議題
　（１）江之子島文化芸術創造センター指定管理者の評価について
　（２）その他
３　閉会

◎主な意見等

服部委員長　：　半年間、教育を1番、ネットワークを2番に重点を置いていたとのこと。かなりバイタリティの高い内容だが、施設のバイタリティの高さというよりも、人材のバイタリティの高さのほうが少し強調されている。
　ところで、まずは、地域創造大賞の受賞おめでとうございます。

坪池委員　：　地域創造大賞（総務大臣賞）を受賞され、そういう意味では全国的に見て高く評価されている施設。審査にあたった立場から、受賞理由は、個別事業ということではなく、enoco には、文化による地域活性化やまちづくりにおいて必要な中間支援機能が備わっており、その中で具体的な事業を展開されているということ。
　プラットフォームとはそもそも何か。現場で、それを具体的に詰めていった姿が、「enoco の学校」や「プラットフォーム形成支援事業」。なかなか外には見えにくいことだが、少なくともプラットフォームを具体化しようとしている形がある。アウトプットを想定してプラットフォームをつくってはいけない。いろんなプレイヤーが集まった中から、最適なアウトプットがでてくるというのがアウトプットの成果を最大化する方法であり、それが enoco では行われていることが評価された。大阪府は、この場所の全国的な意義をもう一度ご理解いただき、どのように活かしていくのかというのを考えていただきたい。

服部委員長　：　現在では、社会課題解決型というのはある種それがなければやる必要もない、というくらい当たり前になっている。もしかすると、enoco らしい新しいネーミングや何か造語でも生み出しても良いのかもしれない。プラットフォーム形成支援事業を実施することが、「江之子島文化芸術創造センター」の PR に有意義につながるようにしてほしい。

８年目を迎え、この間に地域も社会も変わっていっているはずなので、８年目に対してどういう投げかけをしていくべきなのか考えていくべき。改めて、「江之子島文化芸術創造センター」という名称の中にもある「文化芸術」をどういう風に活用していくべきかというのは、テーマになるのではないか。大阪の「文化芸術」のポテンシャルをどう上げるか、「文化芸術」に関するリテラシーをどう上げるか。もしかするともう少し「文化芸術」に対する専門性みたいなことを評価していかないといけない時代になってくるのではないかと思っている。同時に社会課題解決についてもやらないといけないならば、それをベースに「文化芸術」をどのようにクロスさせていくのかが課題。

佐藤委員　：　本当にいろんなことを限られたマンパワーで実施されている。関わってからの３年間でも色んなことを着実に広げられ、目標を達成していると感じられる。また、障がい者への配慮の記載が定着してきたというのも喜ばしい。

総評として、これまではターゲットを絞って実施していたものを公共の施設というで、一般的に今後の数年間でどれだけ広げていくのか。

米山委員　：　関わっている者として、enoco はこんなこともあんなこともしていて、賞ももらい、すごいというのが率直な感想。細かくは色々あるのかもしれないが、総評としては、今後の活動が楽しみ。

藤田委員　：　総務大臣賞を取ったことに尽きる。その上で総評で申し上げると、施設所管課の大阪府の意向を踏まえ、最終的にどう総合的な評価をするのか。公共施設であり続けていく上で、広く府民に理解を得るための情報発信が重要。理解を得ることで enoco への支援要請にも結びつき、それがマッチングできれば一層活動が広がっていく。

服部委員長　：　フォーカスしておきたいことで、貸館については、そもそも当初貸館利用 60%という目標を掲げていたが 45%に下方修正し、その 45%は何とか達成しそうとのこと。60%を目標としたときのアイディア等あるか。

指定管理者　：　一般の方々に対しての告知も大切だが、enoco のネットワークを通じた利用がもう少し増えていくようにアプローチしたり、相談にのっていきたい。

また、ポッセが自立して自分達でも利用する流れを作りたい。ネットワークや教育等、他の事業との連携の中から、貸館に結びつくようにやっていきたい。

坪池委員　：　雰囲気も良いし、下のカフェも美味しいし、それらも踏まえて、東京と比べて単価も安い。東京であれば予約困難なイメージしかないが、どうして利用者が少ないのか理解できない。利用目的の制限や時間的・場所的な制約、または立地場所等、何が阻害要因なのかわからない。

米山委員　：　会議スペースだといわゆる区民センターや民間が提供するマンションの貸室等の方が、割安感があるのかもしれない。

坪池委員　：　以前であれば、レンタルスペースとしての情報発信が足りないのではないかと言っていた。レンタルスペースの情報サーバ―には掲載し、貸室を探している人に直接訴求しないといけない。今は、enoco の HP にアクセスしないとこの情報にアクセスできない。あともう少し真剣にすれば 60%くらい軽く達成できる。

服部委員長　：　ターゲティングの解像度を割と高めにしてみることでプランを出せるのではないか。

坪池委員　：　施設周辺に集中的に訴求すれば、お母さん達や子ども達に教室利用等で借りられる可能性は高い。

事業とリンクして稼働をあげていくというやり方もある。多治見の文化会館で実施されているオープンキャンパスが典型的な例で、会館が出す講座情報をもとに 10 人以上習いたいという手が挙がればそれを開講し、受講料の一部が会館の取り分となるもの。ただし、このように事業とセットにして場所を使うというには、マンパワーが足りない。

また、今回、美術品の活用に関する評価が低いが、開館から時間が経過し、オープン時と状況が変わったことで、enoco の美術館機能を拡充し、コレクションの公開等を強化する必要があるならば、予算や学芸員をつけた上で拡充すべき。府として、コレクションの活用等に係るミッションについては改めて考えていくべきではないか。

服部委員長　：　美術品の活用は次年度でも色々提案していかなければいけないところ。今やバーチャル空間でアート作品を観覧するという、高齢化対策の一つでもある手段もある。アートアーカイブをどのように活用するのかというのは、真剣に考えていく時期。

貸館事業に関しては、この間の涙ぐましい努力というのが、結局、ポッセを育てることによって事業としての活用の芽が見えてきたとの説明もあり、本当に素晴らしい。ポッセに何か教育のプログラム等をやってみないかと投げかけてみるのも、この下地ができたからこそ言えること。確実に人材も場所も成長していると評価。

米山委員　：　貸館に関して気づいたことが２点。スペースが殺風景なので、ここに絵を展示するのは如何か。絵がある会議室、絵があるシェアオフィスにすれば殺風景では無くなるし、付加価値をあげることで料金的な調整、競争ができるのかもしれない。

また、enoco の外観上（掲示板や入口）、壁等を上手に使い、芸術という観点からお洒落なバナーでの貸館告知ができるのではないかと。今のままでは、この周辺を歩いているだけでは、貸館をやっていることはわからない。

また、Facebook のページには「いいね」が少ない。また、そこに貸館をしているという記事もない。いわゆる広告ではなく、タイムラインにこんなイベントしています、貸館も受け付けています等の発信はどうか。利用者や観客等、「人」が出てくるような現場の写真のほうが目を引く。

服部委員長　：　もう一つフォーカスしておきたかったのは、PR。ウェブサイトをチェックしても、コンテンツの量が多く、施設の案内に入るには分かりにくさがある。各コンテンツに関する認知度は上がってきているので、それを施設認知度の向上につなげる方法を考えていくべき。貸館利用を含めて、施設にどう注目させるか。

enoco のニュースレターはすごく丁寧で、良い情報が載っており、デザインも良いので、これをウェブサイトに掲載してみてはどうか。イメージ戦略自体がこのニュースレターに引っ張られている気がしており、ウェブサイトにはこのニュースレターのイメージがどれほど残っているのか。

坪池委員　：　最初はカフェみたいなものでしか扉はあかない。突然展覧会と言われても心を打たない。せっかくあれだけのカフェができて、アルコールもあり、サンクンガーデンはペット連れも OK なのであれば、カフェの案内を全戸配布するだけで全然違う。そして、次の段階は、地下から１～４階の事業スペースにどう上がってもらうかだが、まずその人達の話を聞かないといけない。

アンケートは、昔は個人情報が取れたので顧客リストとしての意味があったが、一般的な「良いですか悪いですか」という問いだけでは何の役にも立たない。この地域に住んでいるお母さん方にヒアリングをするか、モニターを立てて一緒に見てもらう等声を拾うやり方をチェンジしないといけない。ただし、イベントの場合は有効。

また、クレームについては、公にして人目にさらされる形で書いてもらい、それに対して公開で回答する擬似交換が一番有効。ただし、モニタリングも、ヒアリングも、対面での案内も、実施しようとすると人手がかかるのが問題。今のマンパワー・人件費では難しいのでは。

藤田委員　：　定員、面積、アクセス等施設概要を大阪府下のエリア毎にまとめている大阪観光局のMICE施設のウェブサイトに掲載すべき。最近の若者は実際に集まることへの動機付けが薄れており、貸室事業はなかなか難しいのかもしれない。

また、相談窓口を設置し、随時相談にも対応しているとのことだったが、さまざまな相談に対応するには専門性も必要。これまで数年間の日々の活動による蓄積が、ここに繋がっており、大変素晴らしい。

米山委員　：　財政的基盤については、公認会計士である私がいただいた決算書等の資料のみからでは、施設運営を担う上での問題は発見できなかったことをご報告する。

服部委員長　：　半年間の評価は各先生とも素晴らしいということだった。

また、中間支援施設としての在り方や貸館に関するアイディア、文化芸術創造センターとしての在り方、８年目の着地をどのように考えていくのかというのが次年度には重大なテーマになるかと思われる。

以上、委員の皆さまからいただいた指摘・提言については、事務局で整理を行い、公表する。